

# ドレッサー・ジュホースに育てよう!



オースミレブンの肢の問題が深刻であることが判明し、現在は装蹄療法を施しながら運動を短時間に設定し、様子を見ています。痛みを感じさせない日もあり定期的に運動はできますが、歩くことすらままならないこともあり安定しません。人間ももちろんですが、馬が健康であることがどれだけこの競技で大切なことかを痛感します。しかし、これまで馬と共に積み上げてきたものは、決してなくならないし、無駄ではなかったと思います。とても悔しく、やるせなくなりますが、肢を休ませながら今できることをしていきたいと思っています。

さて、彼が残してくれたことを思い出しながら今月のテーマを考えます。現実起こるピアッフェとパッサージュの問題点と1歩毎踏歩変換を考えます。

## ㊦ ピアッフェ・パッサージュ Part5

### ① 後肢の動きが均等でなくアンイーブン (ピアッフェ・パッサージュ)

この問題は、多くの馬で見受けられます。例え世界のトップホースにさえも起きる事象です。それは、究極に収縮した時に左右の後肢に掛かる負担を均等に跳ね返す力が備わっているかどうかにかかわってきます。よくリラックスし、先天的に左右後肢の力の差が少なく、均等に力を加えられる馬には起こりません。

オースミレブンはパッサージュの調教当初、左後肢が右後肢の半分も踏み込みませんでした。それは、両後肢の不均衡に加え、背中が緊張しているところから来ていると思われました。この左右差は現在でも残っています。

これらを解決する方法は、透過性の確立とリラックスにあります。透過性については、これまで多く取り上げてきました。このように収縮度が増す運動であればあるほど透過性が必要になります。

後肢の踏み込みの不均衡をダイレクトに解決するために、踏み込みが浅い方の肢を馬が踏み込もうとするタイミングで、脚や鞭を使うという方法があるかもしれません。しかし、私はあまりその方法は採りません。なぜなら、その扶助自体が不均衡で、馬のリズムを崩し緊張を生むことになるからです。

私が行う解決法は、両脚を同時に強く使い馬を励まし、馬の反応を待ちます。そして馬自身がリズムを作り緊張を緩和させて動ける環境を作ります。透過性を確立しながら推進力を増して、馬自身の底力を引き出し、発揮させる環境を作ることが全てです。

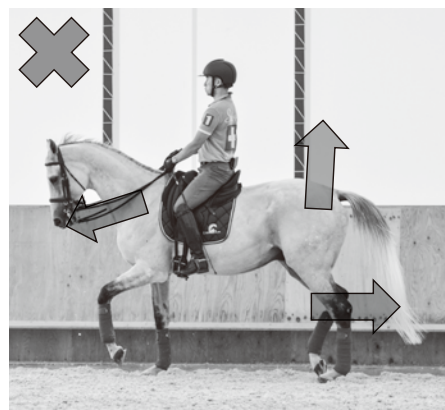
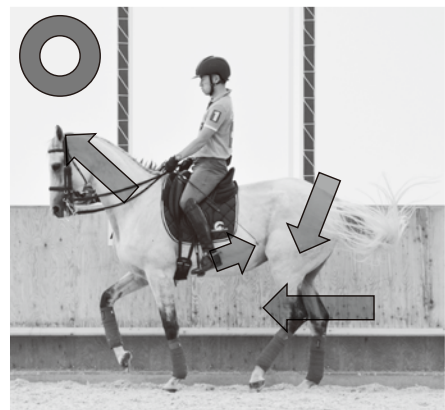
### ② 後躯が沈下せず後肢が馬体下に進出しない (ピアッフェ・パッサージュ)

ピアッフェを求めた時に、馬の後躯の形は、ピルーエットをする時の体勢に似ています。これはほとんど先天的に馬が収縮を求められた際にする体勢です。そのため、騎手は理想的な体勢を求めることはできますが、馬自身が我々の思う体勢になれる元々の素質を持っていないければ、修正することはとても難しいです。それは、絶対にと言ってもいいほど、後肢を馬体下に進出しようとしないう馬がいるからです。面白いことに、どんなヨーロッパの大男が力づくで後躯を沈下させようとしても、その体勢になれない馬はなろうとしません。私もこれまで多くの馬でピアッフェにトライしてきましたが、後肢を馬体下に踏み込まないままステップを踏む馬や、逆に馬体下に入り過ぎて負荷が掛かり過ぎてステップが踏めなくなってしまう馬など、様々なタイプの馬に出会ってきました。その都度、その馬が最もステップを踏みやすい体勢を尊重してやり、決して無理強いすることなくピアッフェを楽しむことに努めてきました。まずは、馬にステップを自ら踏んでみようと思わせることです。ピアッフェも馬それぞれです。その馬が少しでもリズムのあるステップを踏むことを褒めてやり、可能な限り理想に近い体勢になるようにサポートしましょう。

具体的な対策は、手綱扶助を最小限にして頭頸を上げられる環境を作り、脚扶助で後肢の前出を促します。騎座は、やや後傾したり戻したりと僅かな体重移動をして、その馬が後躯を沈下しやすいバランスを探してやります。もちろん脚によつての推進の度合いも大切です。ただ、活発に動かないからといって脚ばかり使用すると、馬は興奮して緊張するか、萎縮して余計に動かなくなってしまふ傾向があります。脚は、馬自身のリズムを呼び起こすために強く使ったり優しく使ったりと工夫が必要です。そして、いつまでも追い過ぎず、馬の反応を待って馬にリズムを作らせることを忘れてはいけません。

### ③ ピアッフェやパッサージュはどの馬でもできるのか

これらの運動は、収縮度が重要になるため、力がある外国産馬の中間種の得意分野です。後躯の力が強い中間種は、踏ん張りが効くためダイナミックな間のある動きができ、表現力豊かなパッサージュなど直ぐにできるようになります。その反面、



中間種はピアツフェのような細かな器用さが必要になる動きに対応できない馬もいます。

一方、オースミレブンなどの軽種のサラブレッドは、後躯に力を溜めるよりも瞬発力に優れているため、収縮度の高い運動は得意とはしません。そのため、パッサージュを要求して実行できる馬は、軽種の中でも力があり、ドレッサーージュホースとしての素質とセンスのある馬と考えられます。またその反面、軽種は細かな動きに対応しやすいため、パッサージュができなくても、ピアツフェは上手に習得する馬が多いです。これらの結果として近年、力のある中間種に軽種がより掛け合わされてきています。

私の経験上、どんな馬でもピアツフェやパッサージュができると断言することはできません。しかし、これらの運動にトライすることによって、副産物としてインパルジョンが向上したり、バランスが改善したり、透過性が確立したり、後肢の筋力がアップしたりと、これまでと違ったアプローチで馬と向き合うこともできます。もちろん、その方法を誤れば、その逆の結果も待っています。

これらの運動をする上で、問題や疑問や解決方法については人それぞれの経験によって答えが割れることもあります。私は、シンプルに以下のように考えをまとめています。

- 頭頸が上がってくる馬は透過性を重視し、頭頸を丸めてやや低く保とうとする。逆に低くなってしまう馬は頭頸を起こしてバランスバックし、アップヒルを求める。
- 収縮度が上がると動きが鈍くなりスローになる場合は、脚で励まし、ややエキサイトさせて細やかな動きになるように回転数を上げる。逆にホットになりやすい馬は、最小の扶助に留め、緊張を解しながら回転数を落とす。
- 騎座は馬の動きに同調しながら静かに随伴し、馬がパワーを蓄積する手助けになるようにする。馬を動かそうとして自分が力んで動いても何の役にも立たないだけでなく、馬のリズムを乱すことになることと自覚する。これらを常に念頭に置きながら、馬と共にピアツフェとパッサージュにトライしていきましょう！

## 1歩毎踏歩変換 Part 1

最後のテーマは、連続踏歩変換の完歩の合間が最も少ない、1歩毎の踏歩変換です。これは、馬がスキップをするように、駢歩で1歩ずつ左右交互に踏歩変換をします。

この運動は、騎手の扶助に正しく反応して踏歩変換ができ、リラックスして2歩毎までの連続踏歩変換ができる馬は実施できるようになります。ピアツフェやパッサージュのようなパワーが必要な運動ではなく、正確な反応が求められます。そのため、騎手の正確な扶助とタイミングが重要になります。私はこれまで、ホワイミー（ドイツ産）、スイングユタカ（サラ）、トレジャーハント（遠野）、ゴールゲッター（釧路）、タイキラファエロ（サラ）、ウイネットウ（オランダ）、オースミレブン（サラ）と品種や年齢を問わず1歩毎踏歩変換を15歩以上実施できるように調教してきました。しかし、1歩毎踏歩変換の扶助を私自身が習得するには非常に時間がかかりました。既にこの運動ができるウサギヨウジンボウ（ドイツ産）という馬に乗って訓練しても、習得までに1年半以上の期間を要しました。「ひょっとしたらこのまま自分にはできないのではないか?」と悩んだほどです。その中で毎日、自分には何が足りなくて、馬に何を与えれば実施できるのか、その要件を考え、試し、感じ、実行する日々でした。それらは、今現在においても私の中で生き続けている要件です。

### 1歩毎踏歩変換を実施するための要件

- 真直性
- 透過性
- 騎座からの推進
- 手綱扶助は最小
- 正確な脚扶助のタイミング

### 1歩毎踏歩変換の調教段階

単発の左右の踏歩変換が騎手の扶助に従って実施できるようになれば、4歩毎踏歩変換を確実にいき、3歩毎、2歩毎、と歩数を減らしても同じようにできるようにします。ここまでは、通常タイミングが早くなっていくだけで大きな問題は起きません。この先の1歩毎は、調教されていない馬にとっては未知の感覚です。だからこそ慎重に丁寧に行い、混乱させず、一つずつブロックを積み上げていくようにしなければなりません。

### ☆調教手順

#### 2回の1歩毎踏歩変換

左手前から→右→左、右手前から→左→右と左右に1回ずつ踏歩変換を行います。この運動は、早い段階で必ず馬に反応させる必要があります。

騎手がこれらの扶助を出すには、駢歩のリズムを感じていなければなりません。それは、今、馬のどの肢が地面に着いていて、どう動いているか、というような細かなことまで把握する必要はありません。もっとシンプルに、①地面に着地しているところから、②空中に上がる過程、③空中に上がっている、④着地しようとしている過程というような大まかな分け方で充分です。騎手がそれらを感じ取れていれば、どこで扶助を出すかというタイミングが掴めてきます。1歩毎の扶助のタイミングは、通常の踏歩変換と同じで、上記の②のタイミングです。1回の踏歩変換をして、直後の②のタイミングで次の踏歩変換の扶助を出します。最初はこの、タン・タンとという2回の1歩毎踏歩変換を両手前から実施できるようにすることが大切です。

次回の最終回は、写真を使いながらより1歩毎踏歩変換のイメージを膨らまし、騎手が注意すべき点をまとめたいと思います。